

高温対策特集号

令和7年7月

「こおりやまの米」通信



GOOD RICE DAY
毎月8日は
こおりやま「お米の日」



編集：郡山市

JA 福島さくら郡山統括センター (Tel. 024-921-0503)

NOSAI 福島中央支所 (Tel. 024-933-3307)

県中農林事務所農業振興普及部 (Tel. 024-935-1310)

発行：郡山市農作物生産対策協議会

(郡山市園芸畜産振興課 Tel. 024-924-3761)

出穂後 20 日間の日平均気温が 26℃以上になると、光合成能力の低下等により白未熟粒の発生が増加します。

また、出穂後 10 日間の日最高気温の平均が 33℃を超えると胴割粒が増加します。

今年の夏も昨年同様に気温が高く経過することが予想されていますので、適切な肥培管理により玄米品質の維持・向上に努めてください。



1 水管理

生育ステージに応じた適切な水管理を心がけてください。

【基本】開花後は根の活力維持を目的に間断かんがいを継続します。開花後 25 日までは米粒の肥大化する時期であり、土壤水分が不足しないように注意し、落水は出穂後 30 日を目安に行います。

【高温時】出穂期以降、高温が予想される場合は、飽水(ひたひた水)管理で夜間の地温水温を下げ、また、用水が十分に確保される場合は間断かん水、夜間落水・昼間湛水管理を行い地温や稲体温度の上昇を抑えてください。

2 出穂期追肥

高温時の出穂期追肥(実肥)により整粒歩合が向上し、白未熟粒の発生割合が低下します。基肥一発肥料を施用した場合でも、極端に葉色が褪めている場合は、出穂直前に窒素成分で1kg/10a(硫安で 4.5kg)を上限に施用します。なお、実肥は食味低下の要因ともなりますので、生育に応じた実施の判断が必要です。

【参考】新潟県における出穂期追肥の判断基準(コシヒカリ)

	判断時期	判断基準
基肥 + 追肥体系	出穂3日前	葉色(SPAD 値)が <u>32 以下</u>
基肥一発体系	出穂 10 日前	<u>葉色の低下がみられ、かつ、葉色(SPAD 値)が 32 以下</u>

3 ケイ酸追肥

高温時のケイ酸追肥は、光合成活性を高め、葉温を低下させる効果があります。通常は、出穂 40 日前にケイ酸加里で 30kg/10a を施用しますが、幼穂形成期～出穂期の追肥でも整粒歩合が向上することが確認されています。